



研究所だより

荒井 絵理菜

新卒で入団して2年目、大学では社会学を専攻し、国際関係論、地域社会学、社会システム論と学んできた。卒論では生活者のための環境政策について書いたが、社会学では具体的な事はなにもできないと、大学院に進もうとも思った。しかし1年間留学したこともあり、まずは働こうと考え直し、学び続けられる環境として労協への入団を決意した。

労協の強みとは、現場の実践にある一。農事組合法人無茶々園、川越出張所特別養護老人ホームみなみかぜ、沖縄の各現場、三多摩事業所立川U友地福タッチ、坂戸地域福祉事業所北坂戸いきいき、ふじみ野地域福祉事業所そらまめデイサービス、埼玉西部地域福祉事業所所沢とうふ工房・菓子工房。1年間という研修期間の中で、多くの現場に足を運ばせてもらい、現場から考える視点の中で感じたことである。「協同労働」、「団づくり」、「よい仕事」、「社会連帯活動」、「仕事おこし」、「地域づくり」等々、そのどれもに共感して入団していながらも、具体的な実態についてほとんど理解していなかったと、1年の研修を終えて思う。現場それぞれの魅力、よい仕事観に触れ、短期間ながらも、現場の仲間の一員として働く中で、協同労働がなんなのか、なぜ今の社会で必要とされているのか、少し分かってきたように感じる。

現場研修の中で見えてきた現場が抱え

ている課題は、色や形は違えど、共通する部分もある。内部外部発信力の弱さ、入ったとしても続かない慢性的な人手不足、責任者の事務作業や提出書類の負担、原価率についても、委託や制度活用をしていない事業所は厳しい状況がある。しかしそんな中でも、35年間にわたって、労協が発展を続けているのは、良い部分に焦点を当てて、広げてきたからだ。私は、35年間の積み重ねの土台を、良い部分だけでなく、課題にも焦点を合わせながら、整えていきたいというのが今の気持ちである。

目に見えている部分は、技術者と協力することですぐに取組むことが出来る。例えば、内部外部の発信力の強化については、すでに労協連でもパンフレットが一新され、協同総研でも新しいパンフレットが制作中である。加えて、協同総研のHP上での入会手続きが可能になれば、現在480名の会員数も増えるのではないか。法制化後に会員数が増えることを予想すると、現在の会員管理システムの統合も進めていく必要が考えられる。同時に行っていききたいことは、膨大にある情報とデータの整理、各事業所と土地や人口との関係分析、協同労働の協同組合のPRの強化、課題レポートや会議アンケートを発展性のある形でまとめる事などである。

ちょうど1年前の4月、日本協同組合

学会の第1回目に参加させてもらった際、立教大学の藤井先生から、社会連帯経済の構図の話の中で「日本の行政や制度が変わらないんじゃないかという考えから、ある種の民主主義論からではなく、地域社会が横とのつながりによって、ど

れほど力を付けていけるのかという視点」という言葉があった。地に足をつけて、地道に、しかし着実に、地域に協同を広げていく事が、私たちの不確実な将来を形作っていくと感じている。その活動の一助となれば幸いである。